



庶民に開放された私塾“混放洞”を開いた教育者

かわい へいそう
河合 平三 (1830~1878)

平三は、天保元年（1830）、砺波郡下山田村（現高岡市下山田）の伝右衛門の三男として生まれた。幼年のころから向学心に燃え、家業を手伝う傍ら寸暇を惜しんで学問に励んだ。7歳の時、富山藩士近藤士専（儒学者）に漢籍の素読を受けた。9歳の時、加賀藩13代藩主前田斉泰に召され、士専に同道して登城し、漢籍の素読を行って非凡な才を賞され、床飾りの「獅子頭石」を拝領した。その後、弘化3年（1846）、16才の時、加賀藩士鶴見小十郎（儒学者）に師事、また嘉永3年（1850）、京都に上って漢学者梅ヶ辻春樵に教えを受けるなど更なる研鑽を重ねた。

安政2年（1855）、帰郷して分家し、農業を営む傍ら、自宅前に土蔵を建て2階に漢学塾の「混放洞」を開設した。吉田松陰が松下村塾を引き継ぐ2年前のことである。幕末の越中には500を越える寺子屋や私塾があったが、恩恵に浴したのには家柄のよいものや金持ちの子弟に限られていた。「混放」という言葉は日本ではほとんど使用されていないが、中国では、これを人に対して用いた場合、「身分の異なる人を集める」という意味で使用される。また、「洞」は、奥まった場所を意味した。これらのことから混放洞とは、「身分にかかわらず人を集めて世に出す奥まった場所」という意味であり、向学心のある者に広く門戸を開き、有為な人材を育てたいという平三の思いが込められていると推測される。

平三は、この混放洞で砺波、射水地域から平三を敬慕して集まった少年らに歴史、地理、医学、薬学、算学等を教えた。学舎は土蔵の2階（約5.5メートル×3.6メートル）を用いた。東西両側と南側の小窓より僅かに明かりがさす一室であったが、そこに多数の門弟が集まった。塾生からは、後に自由民権運動に加わり衆議院議員となる島田孝之や県立農学校（現南砺福野高校）の創設に尽力した島巖、中越銀行取締役で衆議院議員となった安次次左衛門を始め、千光寺住職松田快禅等の僧侶や神官師弟、医師など、中央に地方あって明治維新の激動期に信念をもって活躍する多くの人材を輩出した。

明治2年（1869）に砺波郡治局の内意によって杉木新町に杉木教学所が開設されると講師として迎えられ、また戸長（現町村長）の役にも就いた。明治5年（1872）学制発布後の明治6年（1873）以後中田村、頼成村等の小学校の創立に関わり、砺波地域の教育の発展に尽力した。

明治11年（1878）11月2日、流行性の病気のため、逝去。享年48歳。

<専門員 眞田 武志>

平成30年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



高岡大仏の彫刻家

なかの そうざん
中野 双山 (1881~1940)

明治14年（1881）、中野又次郎の長男として射水郡高岡町定塚町（現高岡市定塚町）に生まれた。富山県工芸学校鑄銅科（現高岡工芸高校）で、鑄物の原型の作り方を学ぶうち、銅器の彫刻家になりたいと考え、明治36年（1903）に東京美術学校（現東京藝術大学美術学部）に進み、木彫などを学んだ。

明治33年（1900）6月の大火で焼失した木造の高岡大仏を作り直そうという機運が明治30年代後半に高まると、母校の工芸学校で教師をつとめる傍ら原型師の仕事に携わっていた双山に、燃えにくい青銅で作る原型づくりの依頼があった。双山が27歳の時で当時、「原型師」の専門家は地方にはほとんどいなかった。

大仏製作に着手すると日々製作に没頭し、明治44年（1911）9月には、大仏の頭を完成させた。しかし、その後は資金不足などの理由で作業はたびたび中断した。ようやく開眼式を迎えたのは、大火以来、実に33年経た昭和8年（1933）5月であった。

大仏の頭部の完成後は、県内各地の像製作の傍ら、書画の製作や作陶、富山県立工芸学校の初代同窓会長を務めるなど趣味や人の世話にも熱心であったが、昭和15年（1940）9月5日に一生を終えた。享年59歳。

<専門員 福田 暁>